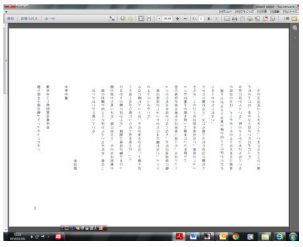
Miyako Akai Public Talk in 2015 Book Art Festival in Hong Kong
香港　講演　赤井都

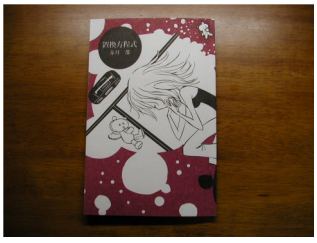
香港ブックアートフェスティバルに出席できて、大変光栄に感じています。
まさか、豆本という小さな物で香港に招待されるとは、思ってもみませんでした。
私は豆本を作って、10 年になります。
私が日本で豆本を作り始めた 10 年前、豆本を知っている人はあまりいませんでした。
それなのに、なぜ豆本を作り始めたのか？

【写真 01】私は、小さい時から、本が好きな子供でした。

母からよく、「本ばかり読んでいないで、勉強しなさい」と叱られました。

【写真 02】絵を描くこと、紙で何か作ることも好きでした。


【写真 03】私は、大学で建築を勉強する傍ら、小説を執筆し、インターネットで発表しました。
しかし、インターネットの中にある文章は、ブラウザの中でしか読めません。文章を、読者の生活の中で身近にある物にしたい、と思いました。

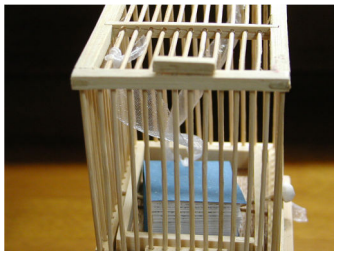

【写真 04】日本で、自分の本を作って売りたいと考えた時、若者向けの印刷製本サービスが身近にあります。

各ページのデータを入稿すると、オフセット印刷し、製本してくれます。
だいたい 20～2000 冊で、ホッチキス中綴じか、糊綴じで注文できます。
ただし、決まった判型から外れることはできません。

【写真 05】そこで私は、販売を目的として、プリミティブな手作りを始めました。13 年前のことです。
自分の手で作れば、自分の小説を、少部数で好きな形に作れると考えました。
日本では、自分で作った本を売る「同人誌」のマーケットイベントが毎年開催されます。
私はマーケットに行って、自分で作った本を売りました。

【写真 06】この頃に作ったのは、たとえば紙バッグに短編小説を貼りつけたものでした。これはとても好評でした。

【写真 07】漂流するストーリーを一枚の紙に印刷し、それを丸めて、ビーズと一緒に壜の中に入れたものも、好評でした。

 【写真 08】続いて、籠に閉じ込められるという短いお話を一冊

の本にした時、本は小さくなり、古書店主から「これは豆本だね。豆本は、世界にコレクターがいるんだよ」と教えられました。
その時に私は初めて、豆本を意識しました。豆本という言葉は、それまでにも、聞いたことはありましたが、古いイメージがして、自分と関係があるものだとは思っていませんでした。

【写真 09】日本では、30～40 年くらい前に、こんな豆本が流行しました。
この時の豆本の多くは、4 インチサイズで、読み切りのエッセイを定期的に発行する、小さな雑誌としての内容を持っていました。
発行人はアマチュアで、印刷は活版かオフセットで印刷所に頼み、製本は簡易なものは自分でという場合が多かったようです。
販売価格はほぼ原価に近く、頒布会員になった数百人の会員たちへ、郵送で送られました。
他に娯楽が少なく、豆本が届いたよという返事も、葉書でゆっくりと送られていた時代の話です。
読者の多くは大人の男性で、私の父の世代より少し上で、今 70～80 歳代くらいです。
発行人も読者も年を取り、豆本ブームがすっかり下火になっていたところに、私たち若い世代が登場しました。

【写真 10】新たに登場した若い女性たちが作ったのは、たとえばこんな豆本でした。
キャラメルかと思うと豆本、ニットに包まれた豆本、写真入りの豆本など、ビジュアルなアピールが強く、本には見えない本、ブックアートです。
これらの豆本は若い女性向けの雑誌で紹介されました。

【写真 11】たとえ四角い本であっても、私たちはそのつど好きな判型で、横長にも、布表紙でも作りました。

【写真 12】私が豆本を作り始めた 2006 年、豆本のマーケットイベント「まめまつり」が開催されました。
これは「同人誌」即売会と似ていて、ただ、出品物が豆本だけのマーケットです。
週末は人がいない殺風景な問屋街で、広いフロアを借り切った即売会でした。

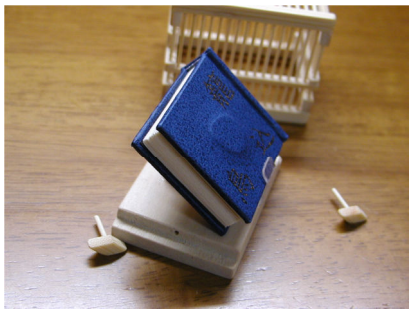
【写真 13】机と椅子を並べて、アーティストが一人ずつ座って、作品を販売しました。これが大変な盛況でした。
なぜ、そんなイベントが開催されたのか？
どうやら、私たち若い世代は、同時多発的に、小さい本を作っていたようです。
パソコンの印刷性能が上がり、雑貨用の素材を身近に買うことができ、製本の方法はインターネットで検索できます。
小さな本なら、少しの材料を使って、小さなスペースで、身近な道具で作ることができます。
パソコンでオンデマンド印刷して、一部ずつ作れば、出版のためのまとまった資金も必要ありません。

【写真 14】このイベント「まめまつり」で、私は同じ趣味の人たちと出会うことができ、情報を交換し、製本技術やアイデアが進みました。
この本は、わざと本文紙をくしゃくしゃにしていて、表紙は紙でできていて、ろうをつけてあります。
イベントをきっかけに、20～40 代の女性を中心に、豆本が急速に広がったと感じます。
製本の本の出版も増えました。当時、手に入る製本の本は数種類でしたが、今では 10 種類以上の本が刊行され、そのうちの 3 冊を私が書いています。
このように、豆本は、若い世代にとっても身近なものになりました。

もしも、私が友達に売る範囲で本を作り続けていたら、私はおそらく ZINE の人になっていたでしょう。
しかし、ハンドメイドとはいえ、ちょっとこだわりを持てば、手間がかかり、友達が買えそうな値段で作れなくなってきます。
また、私には、自分の小説を、自分が属するコミュニティの枠を超えて、世界に広めたい野望がありました。

【写真 15】「まめまつり」で得た情報で、私はアメリカにミニチュアブックソサエティがあって、毎年コンペティションをしていることを知り、応募することにしました。
私のプリミティブな手作りを、年配の豆本コレクターや図書館の人たちが受け入れてくれるように、ファインブックに作り変える必要がありました。
5 か月で、籠に入った豆本を、上製本に作り直しました。初めて応募し、日本人初の受賞を

しました。
この豆本は、どんなものだったか？



【写真 16】籠を開けると、本は台座の上に立っています。

【写真 17】本の中には小口木版の挿画が入っています。
本文の文字の上にもところどころ金箔を押しました。
台座や挿画は、「まめまつり」で出会ったアーティストの協力を得て、共同制作でした。

【写真 18】そしてその翌年には、こんな豆本を作りました。函を開けると、函の中はふわふわのニットで満たされています。

【写真 19】柔らかい手触りで、タイトル文字が透けています。

【写真 20】ニットのジャケットは、雲に見立てていて、雲を捕まえようとするストーリーが入っています。

【写真 21】本文は活版印刷で、印刷の文字は、ページをめくるほど銀色インキを増やして、淡い色になっていきます。

【写真 22】この豆本で、ミニチュアブックコンペティションの連続受賞を果たしました。

【写真 23】この豆本では、私がストーリーを書き、左側の女性が活版印刷し、右側の女性がニットを編みました。

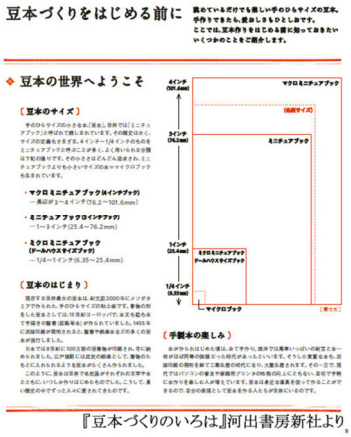
コラボレーションは、私から依頼しました。私は建築を勉強していたから、一つの物を作るために、専門家たちが協力することは自然に思われました。

また、私は工学分野にいたので、人間の知識は多世代にわたって蓄積されていくことも知っています。

そこで、人から習うということも必要だと感じられます。
つまり、一人で経験を積んではなかなか到達できない、数百年分の経験知を、知っている人に一言聞けば、一瞬で到達できてしまうのです。

【写真 24】そこで、私は連続受賞後に、ルリユールを習いに行きました。
大きな本の製本レッスンを受けて、このような、いかにも本らしい豆本も作りました。
本は開いて、閉じなければいけない。その、開いて閉じる動きをすることが、本づくりの難しい箇所だと思います。

【写真 25】伝統様式以外の、ブックアートにも興味があるので、山崎曜先生のアトリエへ行って、こんなブックカバーと函も作りました。
こうして製本技術が身について、なんでも作れる自由ができました。
自由があるので、誰のために、何を作るかを、自分で決める必要があります。
何でも作れるので、豆本を離れたっていいのですが、それでも私は今のところ、豆本に魅了されています。

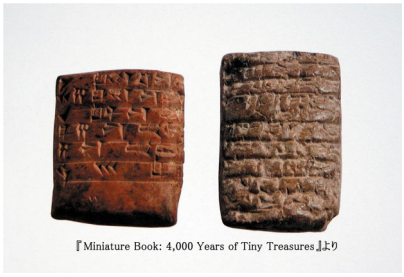

豆本づくりをはじめる前に

豆本の世界へようこそ

『豆本づくりのいろは』河出書房新社より

【写真 26】豆本のサイズの話をしましょう。

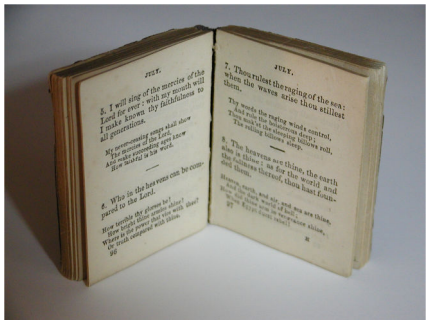
ミニチュアブックコンペティションに応募できるのは、3 インチキューブ以内で、3 部以上発行された本です。
日本でかつてよく作られたような 4 インチの大きさがあれば、文章も絵もしっかり入ります。
また、1 インチの本はドールハウスに入ってかわいい大きさです。
こうした豆本は、いつから、どこで作られていたか？
豆本の視点から、世界の本の歴史が語られたことはありません。しかし、実は豆本は人間の生活の中に、昔からあった物でした。


『Miniature Book: 4,000 Years of Tiny Treasures』より

【写真 27】紀元前 2000 年、メソポタミアで使われた牛の取引などの記録は、2 インチ程度でした。

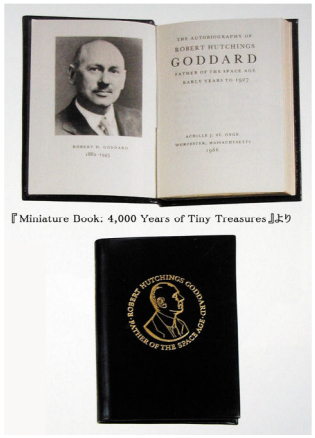
『Miniature Book: 4,000 Years of Tiny Treasures』より

【写真 28】人類史上初めてと言われる、本のマスプロダクション「百万塔陀羅尼」は、2 と 1/2 インチで、日本で 100 万部の発行で、内容は祈りでした。



【写真 29】19 世紀にイギリスで発行された祈祷書です。豆本なら少しの材料で作れて、持ち運びもしやすいという実用的な利点があったのでしょう。

【写真 30】日本では、着物の袖の中に入る大きさの実用書が作られました。これは 19 世紀に普通の人たちが使用していた、流行歌の本と、伝統模様の本です。



『Miniature Book: 4,000 Years of Tiny Treasures』より

【写真 31】現代になって豆本は、月にも行きました。アポロ 11 号に乗ったのは、ロケット用の燃料を開発したゴダート博士の伝記本です。
このように、誰にも気づかれていなくても、実は人類の歴史と共に、豆本はありました。

【写真 32】本とは何か？
私が思うに、本とは、情報を伝えるもの。
本が時代を超えれば、文化を伝えるものとなる。
そうした文化の器である本が、小さい。
たったそれだけのことで、豆本は、身近になり、かわいく感じられたり、一つの世界を掌

に収めているような満足感を感じさせたりもします。
小さいので、本は軽い。素材の軽さは、本を作る時、形に自由を与えます。

【写真 33】私は、本を読ませたい。誰かに所有してほしい。それが制作の動機にあります。
人に読まれて本は完成すると思っています。
製本技術を使って、コレクターが喜びそうな、時代を超えて残りそうな、手の込んだ本を作りたい。大事にされて、何度も読まれたい。
たとえば、今回展示にも持ってきた、不思議の国のアリスの豆本。また、活版印刷の和綴じの豆本が、大事に読まれたい本です。

一方で、誰でも気軽に買える、気楽な遊びとしての本も作りたい。本ってこんな形でもあって、おもしろいの、と人をびっくりさせたい。
たとえば、三角形の折り本。また、フラッグブックの豆本。

さらに、実際に使うノートブックとしての、手製本。丈夫に、開きよく作れる手製本は、ノートにも適していて、使用すると最高の気分です。
これらの本は、展示で詳細にご覧ください。

【写真 34】こうした本を、誰のために作るか？

私はこれらの豆本を、インターネットの通販と、東京の本屋さんで販売しています。

【写真 35】2006 年のブームの始まりの時の勢いは今ではありませんが、本屋さんで、豆本は根強い人気です。

継続すれば、豆本は一過性のブームではなく、生活に根差した文化にいつしかなってゆくと思って、続けています。

【写真 35】豆本販売の一角で、ワンコインで買える豆本のがちゃぽんを、豆本の入口を広げるためにやっています。

香港にも豆本がちゃぽんがあると知って、大変興奮して香港にやってきました。

香港でのこのブックアートフェスティバルが、参加者それぞれにとって、大きなエポックメイキングな出来事になると信じています。

以上で私の話を終わります。